

[遺族] 八木 俊介 氏（昭和 55 年（当時 10 歳）、父を交通事故で失う）

[要旨]

〇50 年経って思うこと

僕は 10 歳の時に父親を亡くし、大人になるまで支援いただきました。その縁で、23 歳の時、あしなが育英会に就職しました。その後、阪神・淡路大震災や、自殺で親を亡くした子供達や癌で親を亡くした子供達、東日本大震災で親を亡くした子供達など震災遺児・津波遺児の支援に携わらせていただきました。

父親が死んでもう 50 年になります。昭和 55 年 5 月 5 日こどもの日。毎年こどもの日が父親の命日で、当時は家族揃ってお墓参りに行きました。僕はあと 3 日で 11 歳という年頃だったので、父親が亡くなった当時のことや事故に関わること、その後の家族の大変だったことなど全部覚えているつもりです。3 歳年下の弟（当時小学 2 年生）は、父親の声も、少しだけエピソードみたいなこと以外は、ほとんど覚えていないそうです。

岩切先生の講演を聞いて、グリーフとかトラウマは自分に当てはまると思いました。例えば、父親がバイクで事故に遭った時最後に会ったのは僕だったんです。その時、「気を付けてね」と言っただろうかなど心に残っていたり、父親の事故現場も絶対行きたくなかった。やはり悲しみやトラウマがあったのだらうと思います。ただ、「回復した」とは 50 年経ってもひとつも思っていない。母・僕・弟の親子 3 人で何とか生き残ってきたという気持ちです。やはり 50 年位経ったから今このような話ができるのであって、その当時は自分がどういう状態にあるのか全く分かりませんでした。

〇当時の状況

事故の時、母親は叫ぶように泣いていました。私の家は居酒屋をやっていて、父親が死んで母親が再開することになりましたが、母親は車の免許を持っていなかったのが最初是人にお店を手伝ってもらい、仮免を 7 回も落ちながら免許を取りました。父親が遺した居酒屋を自分で何とか再開したいと思っていました。僕も小学 5、6 年生の時、ビール瓶を運んだり、夜中までずいぶん手伝っていました。

中学校の卒業式は、僕は涙が出るくらいうれしかったのです。それは、母親も突然亡くなっても、中学校を卒業したら自分で働くことができるので、児童養護施設や親戚に預けられることがなくなるからでした。母親はよく、「私が死んだら児童養護施設に行きなさい。児童養護施設に行かないと親戚にたらい回しにされる」と言っていました。それが一番怖くて、中学校を卒業していつでも働けるようになったらいいなと思っていました。

〇子供にとって必要な支援を

僕は今支援者の立場でもありますが、支援は難しいということです。自分の体験と震災や津波で親を亡くした子供達を見て思うことは、心のケアはとにかく長くかかると思います。

何かをしてあげようというより、傷付くことや嫌なことを起きないようにしてあげることが、特に小さい子供の頃は大事ではないかと思っています。

僕も嫌なことだらけでした。「交通遺児を励ます会」にすごく助けてもらって有難かったけれど、「交通遺児」という言葉を見ることさえもすごくつらかったですし、今でもやっぱりつらい時もあります。なおかつ「励ます会」という言葉を見ると「なんで励まされなきゃいけないのか」と思う。そんなことは山ほどありました。

生きていくので精一杯だったので、非行に走るんじゃないかと思ったこともありますが、野球のおかげで非行に走ることもありませんでした。野球を通していろんな人に見守られました。悪いことはできない。何とか高校にも大学にも行かせていただきました。それと、弟がいなければ生きていけなかったのではないかとも思います。

保護者の支援も大事だと思いますが、子供を優先して支援をすることが必要だろうと思います。いろんな団体の支援は本当に必要だと思いますし、特に小学校や中学校、幼稚園の先生に子供達のことを理解してほしいと思います。